

## 宮崎大、先導的 IT セミナー「岐路に立つ数理科学教育」を開催

宮崎大学では10月18日(月) 明治大学教授の長岡亮介氏をお招きし、標記の講演会を開催した。会場には、学生・教員をはじめ、県内の教育関係者など、約50名の参加者が集まった。今回、長岡氏は「岐路に立つ数理科学教育 不易と流行、ロゴスとテクネー」という題で、ICT(情報通信技術)を活用した教育改善の可能性について、独自の考えを披露された。

冒頭、「不易とは、決して変わってはならない永遠不滅のもの。それは学問の基本。一方で、常に時代の先端、その空気を感じながら、新しい文化、芸術、それを創造していかなければいけない。それが流行」と、松尾芭蕉の言葉を使い、演題の意味を説明された。インターネットや携帯情報端末の登場など、技術革新のたびに、e-learning、video on demand など新しい教育が語られてきた。これに対し長岡氏は、「期待が裏切られた例は多い。通信教育のメリットは『いつでも、どこでも学習できる』であるが、それは裏返せば『いつかやろう』ということでもある。教室での授業と比較し、何が何でも学ぶ、という緊迫感がそこにはない。しかし、コンピュータ技術により、伝統的な論理・演繹的認識以外に、操作的な認識という人間の新しい認識の仕方が、我々の身近なものになりつつあることも確かである。そこにある新しい教育の可能性を探求したい」と熱く語った。

長岡氏は、家庭教師、予備校の講師、ラジオ講座の講師など自身の教育経験から「結局、本人のやる気があるかないかが決定的。親から言われていい先生に習っても成績は上がらない。何らかの意味で、感情、情感、そういうものをベースにしないと教育は成立しない」と語り、「双方向性の遠隔教育では、情報が単に相互に飛び交うだけでなく、学生が勉強に対して前向きである、たとえば、学生が先生のことが好きで、その先生と会いたいと思っている、という双方向性も重要。そういうものが ICT でどう実現できるか」などと述べた。長岡氏の今後の活動に注目したい。



「技術の革新」のたびに「新しい教育」が語られてきた！

- 郵便の普及 ==> 学校以外の教育, 通信教育(いつでもどこでも)
- ラジオ・テレビ ==> 教育放送の可能性, 教室に配置された TV monitor
- 小型コンピュータ ==> 簡易プログラミング, CAI
- 高性能電卓 ==> 計算機から簡便なツールへ
- multi-media ==> 画像データ, 音声データを利用した「魅力」溢れる教育
- pointing device (display を通じた双方向処理) ==> interactive な教育

長岡氏によるセミナーの様子